

地方における港湾の歴史的変遷と地域との係りに関する調査研究

福島高専 正員 高橋邦雄
東北大学 正員 湯沢 昭
運輸省 正員 新井洋一
東北大学 正員 須田 照

1 はじめに

四方を海に囲まれたわが国において、港湾は、古来より大陸の接点としてあるいは国内輸送や生活の基盤として重要な役割りを果たしてきた。加えて現在は、大規模産業港湾、エネルギー港湾等わが国の産業基盤の基礎をなしている。そして今後は、港湾の第一義的な機能である流通機能に加えて、工業生産機能レクリエーション機能、エネルギー等の備蓄機能等多様な要請を包含し、地域社会の発展の基盤となる総合的な臨海空間としての港湾が望まれている。

特に港湾は大規模な土木施設であり、その構築には長い年月を必要とする。このような大プロジェクトを計画し、実施に移すためには、地域住民の深い理解と港への愛着が、その成功のカギを握るものと思える。

本研究は、重要港湾である小名浜港（図・ノ参照）を調査対象とし、歴史的な港の発展課程と住民との係りについて調査分析することにより、港湾計画と住民運動との相関を見出そうとするものである。なお調査は次の仮説の基に行なった。

（ノ）プロジェクトの推進エネルギーとして、地元の“熱意”が存在する。

（2）“熱意”は、歴史的にみると「繰り返し」「持続的に」表われる。

（3）地元“熱意”が存在するならば、プロジェクトは大きく進展する

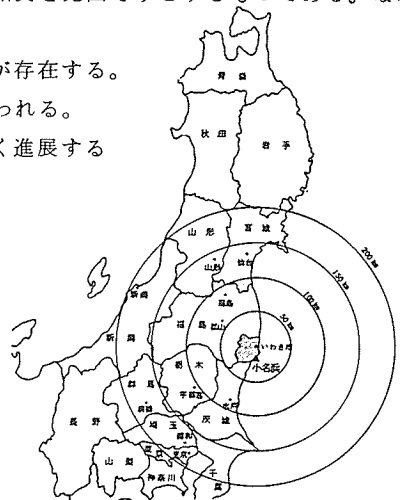
2 調査地域の概要

小名浜港が「港」として、歴史上に地名が表われたのは、ノ6世紀後半である。その後、河村端賢により東廻り海運が整備され小名浜はノ672年に東廻り海運港として設置された（図・2）。ノ747年には、磐城各藩の幕府納付米の江戸積出し港として開港され、それまでの一漁港から各地との交易港、江戸米の積出し港へと転換した。

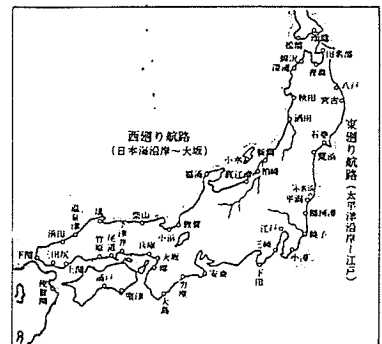
江戸末期まで漁業と米の積出し港であった小名浜港は、ノ855年（安政2）片寄平蔵による石炭露頭の発見（後の常磐炭鉱の基礎）以来、大きく変貌を遂げた。しかし、ノ897年（明治30）上野と平間に開通した常磐線は小名浜を迂回したため、常磐炭の鉄道輸送の切り替えて小名浜港は寂れ始めた。ノ9ノノ年（明治44）に小名浜築港期成同明が発足し、住民挙げて避難港建設の促進運動を展開した。

その後、小名浜漁業組合の法人化、小名浜臨港鉄道株式会社の創立、あるいは漁港修築工事の施工次第に商港としての足掛りの基礎を固めて行った。

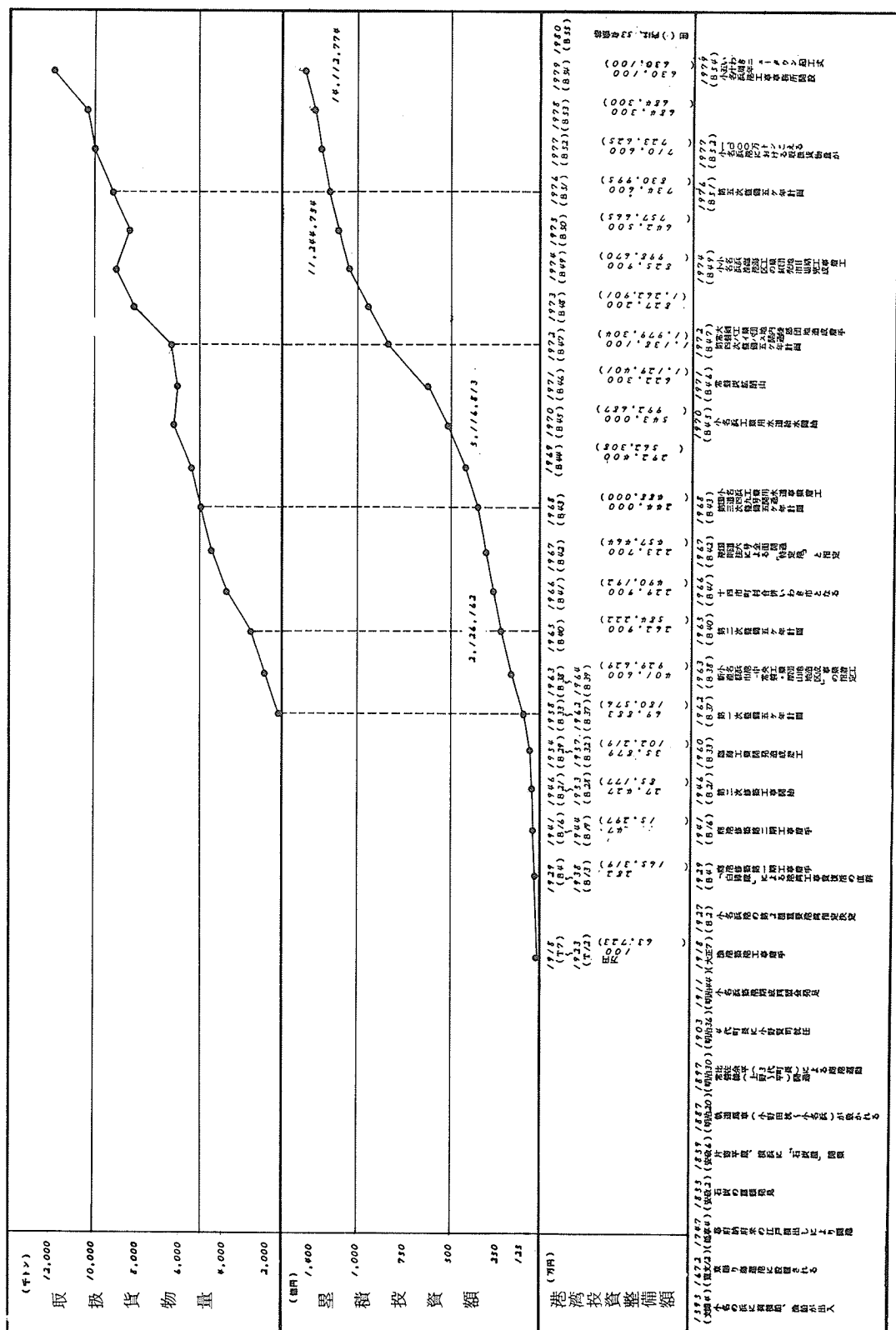
築港運動をさらに大きく進展させたのは、県会議員小野賢治始め、第7代町長鈴木栄あるいは町会議員らの力による所が大きく、ノ927年（昭和2）には小名浜港の第二種重要港湾指定が決定した。



（図・ノ）小名浜港の位置

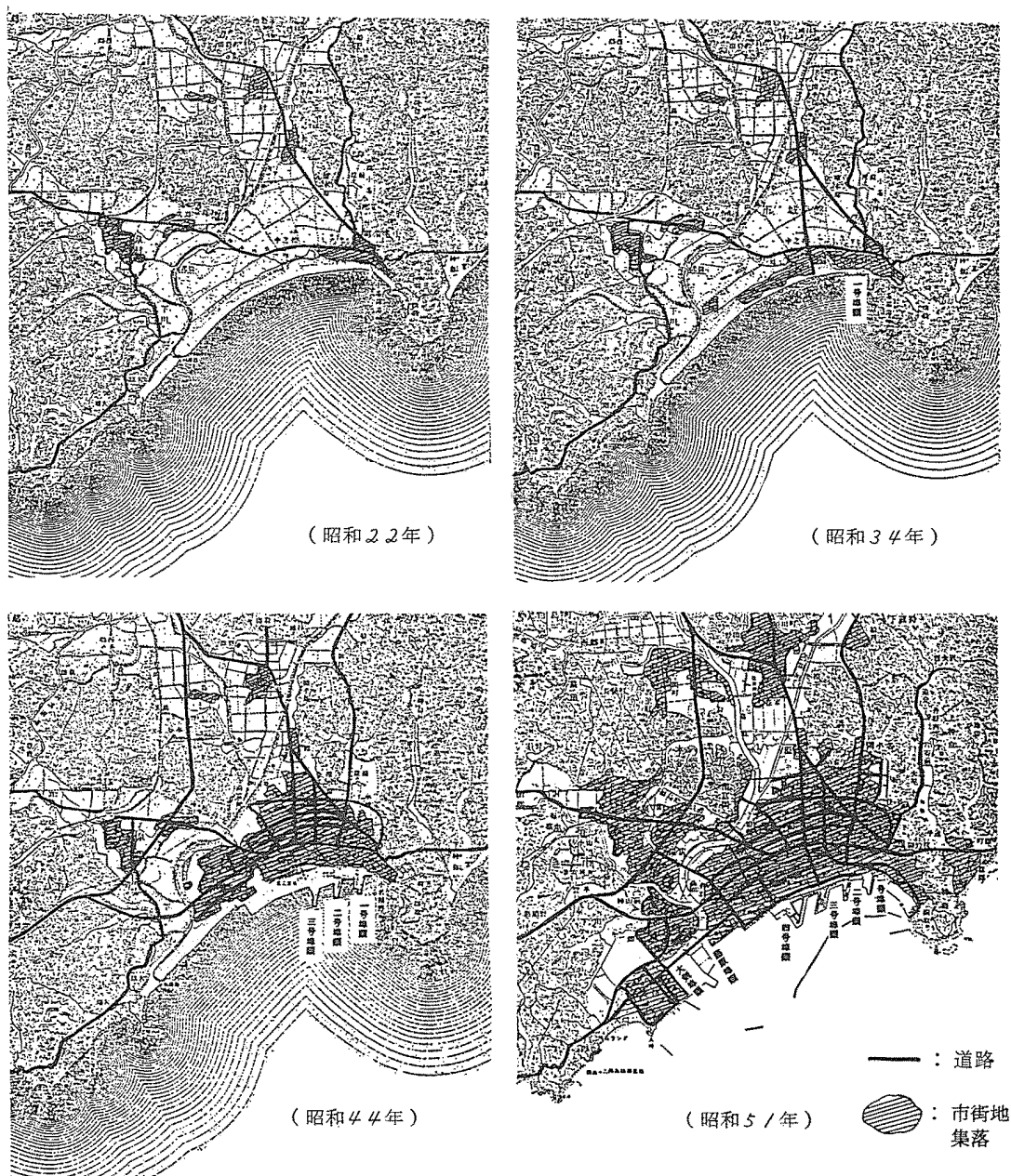


（図・2）東廻り・西廻り海運



昭和4年当時の浜口内閣は、小名浜港修築工事を65万円より5万円へと大巾削減すると同時に平～小名浜間鉄道の工事を延期する決定を下した。この決定に対し、事業費の復活には大衆動員によって、商港への熱意を誇示するしかない町民27名による「港湾復興決起隊」（所謂 白樺隊）が組織され直訴に及んだ。この活動が実って、その後、港湾修築事業が復活した。

昭和30年代に入ると、日本経済は新たな発展段階を迎え、1962年（昭和37）の第一次整備5ヶ年計画から、1976年（昭和51）の第五次整備5ヶ年計画に及ぶ各港湾整備計画により、小名浜港の様相は一新してきた（表・1、図・3参照）。



（図・3）小名浜港と土地利用の変化

3 戦前の港湾計画と住民運動

前節でも述べているように、港湾整備計画に基づいて港湾整備が行なわれたのは、戦後であり、それ以前における港湾整備は大半が地元の強い要望と港湾に対する熱意によるものであった。本節では、江戸末期から戦前における小名浜港の変革と地元住民との係りについて述べることにする。

3・1 江戸時代の築港運動

江戸時代及びそれ以前は、これと言って組織だった築港運動は無いので、港に係った人物と築港事業を述べる。

○ 片寄平蔵（1813～1860）「石炭営業の開拓者」

四倉町に生まれ材木商の家業を継ぎ、江戸商人と材木取引中に黒船の燃料として石炭の販路を知る。後に幕府軍艦操練所の御用達となり、横浜に「石炭屋」を開き外国船に常磐炭を売り込んだ。

○ 加納作次郎（1803～1873）「いわき石炭の発見者」

二本松藩領白岩村の鈴木家に生れ加納家（湯長谷藩の上士）の養子となる。酒造業を営む藩・幕府の特権商人であった。白水地区で石炭を発見する。

○ 加納作平（1829～1893）

加納作次郎の養子、1869年兵部省より「石炭方御用達」を命ぜられ「黒星炭」の商標で小名浜より積出す。1871年小名浜にロシアの商船が入り、藩庁の許可を得て、1500俵を販売する。その後、月に3000俵内外の石炭の供給を行なう。

3・2 常磐線の開通（明治30年代）

明治の初めにおける産炭地と市場とを結ぶ石炭運搬の問題は企業の盛衰を決する程の重要問題であった。常磐炭田の場合、次の2点に輸送問題がまとめられる。

（1）山元より積出港への運搬経路の改善→駄便より軽便鉄道への転換

（2）産炭地より消費地への輸送方法の全面的改善→海上輸送から鉄道輸送へ

1887年（明治20）磐城炭鉱社は、小野田炭鉱と小名浜港との間3kmに軽便鉄道を敷いた。この軽便鉄道の開通は航外運搬施設の最初の近代化として着目される。

しかし、船舶による海上輸送は、風波による危険性や不安定さがあった為、当時の石炭資本の強い要求は、陸上輸送への転換をはかることであった。

1897年（明治30）上野と平間に開通した常磐線は小名浜を迂回した為、常磐炭の鉄道輸送の切りえで小名浜港は寂れ始めた。

3・3 築港運動（明治末期）

1895年（明治28）三代町長比佐余平を中心に、港町立てなおしの為、種々の対策を練った。その結果次のような港湾修築計画が打ち立てられた。

（1）自然に恵まれた港湾に対して、充分なる技術面の諸設備を整えること。

（2）港湾の整備拡充に伴い、産業の発達を図り商工業の繁栄を伴わせること。

ここに、自然港湾に変わる人工港湾計画が始めて打ち出された。従って、この時期をもって、正式な港湾運動の第一歩と言うことが出来る。続いて、後年「小名浜港復興の祖」とおがれた小野賢司にバトンを引き継いだ。小野賢司の卓越した手腕による修築計画・運動は数多くあり、小野家3代に渡って受け継がれる。

3・4 大正時代の築港運動

大正期は、鈴木栄町長の時代と言うことが出来る。1908年（大正7）小名浜漁港修築工事が着手され、この時、前町長 小野賢司が県会議員となり、小野－鈴木の名コンビが出現した。1923年（大正12）小名浜港漁港修築事業が完成したが（図・4参照）、港の構造上の欠陥から、漁港防波堤と港内との流砂がひどく大規模の工事を必要とした。その結果、鈴木栄町長は、商港運動に踏み切る大英断を行な

うことになった。

3・5 昭和初期の築港運動

昭和に入って築港運動は益々熱をおびて来た。1927年（昭和2）に内務省は第二種重要港湾候補地、1928年小名浜商港の予算（工費予算400万円）が貴・衆両院を通過した。以上の確定を得てから、県予算65万円を計上して、商港着工の運びとなった。比佐余平町長の時代からして、約40年の才月を費して、漁港から商港への転換策が実現した。加えて、平小鉄道も185万円の工費をもって1930年より着工の運びとなった。

しかし、1929年、田中内閣から浜口内閣に変わり、極度の緊縮政策が行なわれ、港湾修築工事費を年間65万円から5万円に大巾削減、さらに平小鉄道の延期の通達を受けた。

（図・4）小名浜港の平面図（大正12年）
ここにおよんで、県庁に出頭する陳情団17名が選ばれ小柳知事と会見し、一万町民の死活問題及び生活権の喪失を訴えたが、知事の意向は次のようであった。

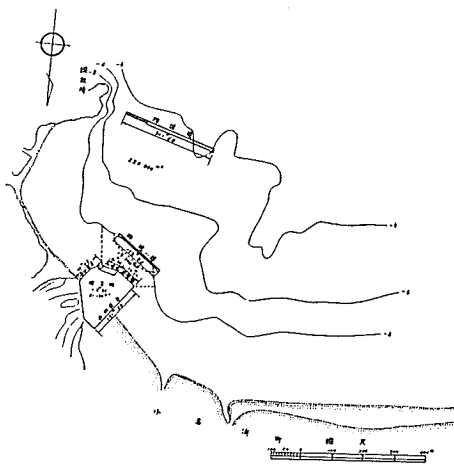
1. 内閣の基本政策につき困難なる事

1. 故に地方長官では力及ばないと言う

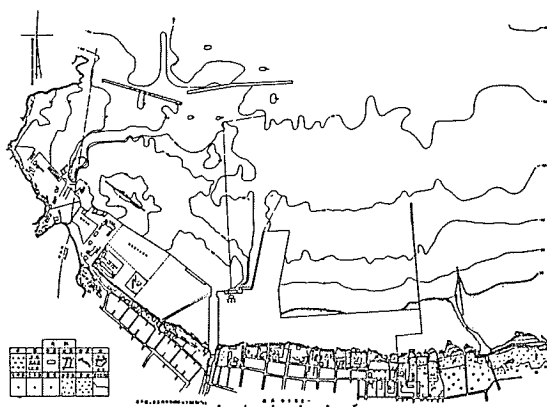
此の為一同は、万こくの涙を吞んで帰郷せざるを得なかったが、此の時知事は別れるに際して「本省への陳情あるのみ」と含みのある指向を与えたのである。そこで一同は憂いの中にも一抹の力を得て帰郷するや、直ちに町民大会を開催し、知事との会談模様を訴えたのである。熱叫した町民の声は、本省への陳情嘆願せよとの要望に一致したのである。ここに町民217名に及ぶ「港湾復興決起隊」が組織され、1929年7月19日大挙して上京したのである。その後、港湾修築事業が復活し、昭和10年小名浜商港第一期工事（3千トン岸壁2バース）（図・5）が落成した。国際港となり、新産業都市の海の玄関として発展してきたのは、この217名の大奮起と断行による賜物であることは歴史が如実に物語っている。

4 現在の住民意識

前節で述べているように、戦前における住民の築港運動に対する「熱意」が、現在の小名浜港の基礎を築いたと言える。戦後の港湾計画は、昭和25年に制定された「港湾法」以来、第一次整備5ヶ年計画を始めとする各種上位計画により現在の小名浜港が進展してきた。しかし、近年の土木事業に対する住民の反対運動の中で、小名浜港が順調に計画を遂行できたのは、長い歴史の中で培われてきた地



（図・4）小名浜港の平面図（大正12年）



（図・5）小名浜港の平面図（昭和10年）

問 港を市民に親しみのあるものとするためには、どのようにすれば良いと思いますか。

公園や緑化 (140)	レジャー面 (204)	港の見学 (127)	港の広報 (190)	きれいな港 (324)
----------------	----------------	---------------	---------------	----------------

その他(14)

問 港が市民生活に影響を与えていると思うものは何ですか。

産業の発展 (463)	自動車交通の増加 (232)	犯罪 (106)	生鮮食品が安い (171)
----------------	-------------------	-------------	------------------

その他(28)

問 小名浜港は将来どのようにあるべきだと思いますか。

港の縮小(09)			
港の整備・拡充 (546)		環境整備 (306)	その他(08)
(215)		沖合い拡張 (208)	(49)
(418)		現状維持 (114)	(26)
			(18)

（図・6）小名浜港に対する住民意識

元の港に対する理解と愛着であろう。

本節では、現在の住民の港に対する意識調査（昭和５６年３月調査）より、今後の小名浜港の姿を住民側から考察してみる（図・６参照）。

これらの結果から分るように、「港の整備拡充に積極的にとりくんで地域の繁栄を計るべきである」と言う意見が過半数をこえている。しかし、それと同時に、親しみのある港にする為、環境を整備し、住民に開放されたきれいな港に努めることが必要である。

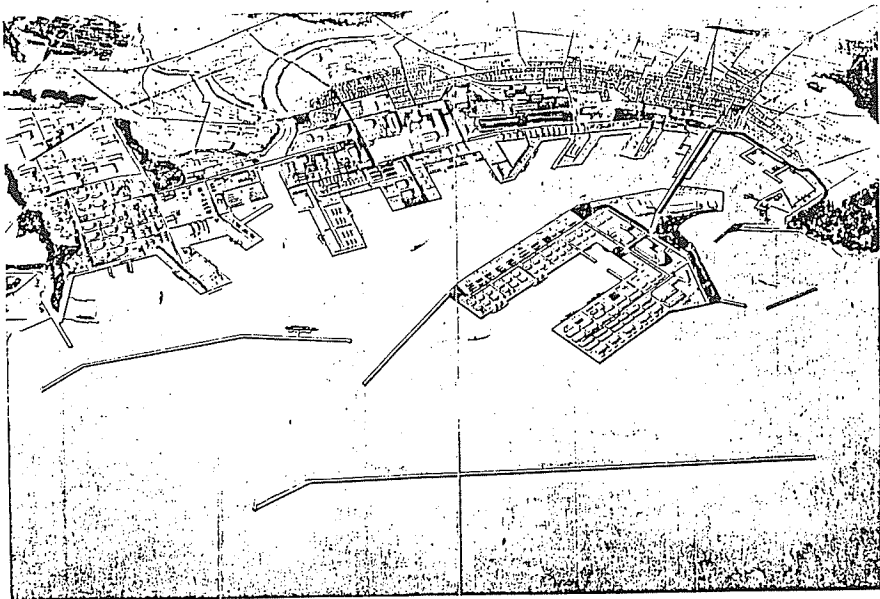
５ 今後の港湾計画

現在、小名浜港においては、石油代替エネルギーとしての石炭転換への対応、漁港機能の再編強化及び安全対策が急務であり、更に港勢の進展に伴い、背後都市の環境改善に資する為の用地確保、レクリエーション需要の増加に対応した海洋性レクリエーションの場の提供も要請されている。このような情勢に対処する為、昭和６５年度を目標として（図・７参照）、以下の港湾計画の方針がたてられている。

- （１）南東北地域の物流拠点、及び地域産業振興の拠点として、港湾機能の拡充強化をはかる。
- （２）漁船の大型化、水揚量の増大に対処して、漁港機能の再編強化をはかる。
- （３）港湾の安全、船舶の避泊する水域確保の為、防波堤の整備をはかる。
- （４）レクリエーション需要の増加に対処する為、マリナーの整備をはかる。
- （５）快適な港湾の環境を確保するとともに、周辺の環境との調和をはかるよう、環境保全施設の整備をはかる。
- （６）港湾交通と一般市街地交通を分離し、港湾貨物の円滑な流通を確保する為、臨港交通施設の整備をはかる。

港湾取扱貨物量は、背後圏の発展とともに順調に推移し、昭和５４年においては外貨４３３万トン、内貨７１４万トン、合計１１４７万トンに達している。今後、貨物量は益々増大するものと考えられ、昭和６５年の目標年次には、外貨１３６０万トン、内貨１９８０万トン、合計３３４０万トンと定めている。また、それに伴う新規埋立て用地を２００ha、総工費２２００億円を見込んでいる。

昭和５６年３月に行なわれた、福島県地方審議会においても、特に地元委員から本計画推進の強い要望が出され、新計画の進展に対する“熱意”を感じた。



（図・７） 新小名浜港港湾計画鳥瞰図

6 まとめ

本報告の調査対象とした小名浜は、静穏な水域と背後地に恵まれたが、近世においては、近村に寄生すべき一漁村であった。しかし、小名浜が土地に生活を根ざすより海付農村として、海に生活の糧を見出す以外、生きる術がなかったと言う歴史を持っている。

明治末期より昭和初期にかけてのすさまじい築港運道の歴史は、それらのことを如実に物語っている。「板子一枚下は地獄」感を／人／人が持つ中で、築港の原動力となった住民の港に対する“熱意”は、現在も「小名浜人の気質」の中に生きている。

また、各時代における住民の“熱意”は、その時代のリーダーシップをとる人を中心として増幅され、あるいは、住民の“熱意”がリーダーを生み、それらの力が港湾運動へと進展したことが小名浜の場合確かめられた。

本調査に当たっての「仮説」が全て証明された訳ではないが、長い歴史の中で、築港に対する“熱意”がプロジェクトを大きく推進させてきたのは間違いないところである。

今後、小名浜港が総合港湾として一段の飛躍が期待されるが、小名浜港は港湾としての立地条件に恵まれているのであるから、その成功の可否は、今後の住民の“熱意”にかかっているであろう。

最後に、調査に際しては、現地調査・資料収集に協力していただいた方々を列記して感謝の意を表する次第であります。

- いわき市教育文化事業団・市史編纂室
- いわき商工会議所
- いわき市役所
- いわき民報社
- 福島県水産試験所
- 三猿文庫
- 運輸省第二港湾建設局・小名浜港工事々務所